

旅する言語学者、青木三郎先生

渡邊 淳也

青木三郎先生が筑波大学に赴任されたのは 1986 年でした。その 2 年前にパリ第 7 大学で学位をとられ、赴任当初はまだ 20 代という、たいへん若い先生でした。わたしは 1987 年に筑波大学に入学しましたので、青木先生が筑波に来られて間もないころのお姿を記憶している世代に属しています。

1988 年、フランス語学を専門にしようところを決め、青木先生のご担当科目をわたしも履修しはじめました。当時から青木先生の印象は鮮烈で、10 代のころからフランスで就学しておられたせいか、自在な活力に満ちた先生でした。

学類時代にもっとも印象的だった青木先生のことばは、「辞書は 1 秒で引け」というものです。もちろん当時は紙媒体の辞書しかありませんでした。「1 秒で引く」ということは、ほんとうに辞書を引きなれているなら、1 冊の辞書のどのあたりに目ざす単語があるかわかるくらいになっているだろう、そして理想的には、最初にひらいた見開きのなかに目ざす単語がなければならない、というわけです。

つぎに、「学習・研究はゲリラ的にするものだ」、「1 日に 16 時間勉強しなさい」とおっしゃっていたことも鮮明におぼえています。当時、筑波大学の中央図書館は 9 時から 22 時まで開館していましたが、はじめからおわりまでこもっていても 13 時間にしかありません。ひとり暮らしで、買いもの、炊事、洗濯など、日常的なこともしなければならなかったので、16 時間は無理でも、12 時間を次善の目標としてがんばっていた時期があったこともなつかしく思い出します。

また、「文法書は必要のところだけを見るのではなく、通読するべきものだ」ということで、当然ながら Grevisse の *Le Bon Usage* の通読をすすめられましたが、Goosse 共著になったことで、先生が学生時代にお読みになったと思われる版に比べると 3 倍くらいの厚さになっていたため、後ろ足を踏んでしまい、かわりに大学 3 年の夏、Chevalier らの *Grammaire du français contemporain* を通読したこともよい思い出です。

そして、「フランス語学を教えることを通じて、人生について教えたいと思っている」ということばも印象にのこっています。この命題のすくなくともひとつの具体例としては、研究に身をささげること、みずからの生きかたを規定してゆくことであると理解しました。

大学院にはいつてからは、わたしは (よくあることかもしれませんが) 精神が失速することが多く、研究相談のつもりが、話しているうちにやら悩み相談のようになってしまうことも多々ありました。青木先生はそんなときはいつも、気ばらしをしてヴォルテージをあげて、また挑戦するようお励ましく下さいました。先生自身もお仕事のうえでいろいろとたいへんなことがあるにちがいないのに、どこからそんな元気がわいてくるのか、いつも不思議でした。まるで、先生が恒星で、わたしはその光と熱をわけてもらうことでかろうじて存続している惑星のような気分になることさえありました。わたしの直接の指導教員はずっと古川直世先生でしたが、フランス

語学領域では (そしておそらく、文芸・言語専攻全体としても)、教員別に学生を系列化させないという共通理解があったおかげで、青木先生からも多くのご指導をたまわりました。

先生は、お子さんたちがおさないころはよく、週末に学生たちをご自宅に招いてくださり、昼食をごちそうになることがありました。また、それ以降は、つくば近隣の酒肆に連れ出してくださいました。土浦にある紅灯のちまた、桜町にごいっしょしたこともあります。もっとも、そのときに行ったのは台湾料理店でしたが。

2006 年、わたしが教員として筑波にもどってきてからは、院生たちをまじえて同様のイベントを多くもよおしてくださいました。大学の近隣、とくに当時は天久保三丁目にあった《きく乃家》で終電の直前まで飲みかわしたことや、八郷 (やさと) の温泉施設に連れていってくださったことなどを思いおこします。convivialité をだいじにしておられることがわかりました。

当時は筑波の文芸・言語専攻フランス語学領域の大学院はたいへん栄えていて、多いときは修士・博士 (より精確には、当時は一貫制大学院でしたので、1 年次と 3 年次編入) をあわせるとフランス語学だけで 5 人入学したときもありました。いまおもえば、フランス語学領域の最盛期だったと言えるかもしれません。

海外でひらかれる学会や研究会にも、他領域の先生がたといっしょに、ときには院生もひき連れて、集団で参加することがありました。フランス (パリ、ブザンソン) はいいうにおよばず、チュニジア (スース、チュニス、マハディヤ)、中国 (北京)、ウズベキスタン (タシュケント、サマルカンド) での学会、研究会にはわたしも参加しました。これらの機会に参加し、研究発表をすることは、とくに院生にとっては実績を積み、経験値をあげるために大いに役立ったことでしょう。青木先生は学会や研究会のほか、その他の調整や交渉のために海外出張されることも多くありましたので、わたしの何倍もの回数、ほとんど毎月のように海外に行っておられました。

青木先生が組織の管理運営に精をだされたのも、研究のための基盤整備という考えからすると、当然の帰結であったかと思います。当初はさまざまなプロジェクトを率いることからはじまりました。「つくば言語文化フォーラム」は、角田太作先生の命名をお借りしたとのことでしたが、実質的な活動は青木先生が牽引しておられました。科研費で『対照研究』というシリーズを刊行しておられ、名詞限定、属格、発話マーカーなどのテーマで論文集を編まれました。のちには『「も」の言語学』、『「た」の言語学』がいずれもつくば言語文化フォーラム名義で、ひつじ出版から公刊されました。これらの論文集の出発点になった研究会はつくばで開催され、発表者の先生がたはとまりがけで各地から来られ、一度はつくば市遠東にあるログハウスで合宿形式で (しかも、各発表者が家族づれで) ひらかれたこともありました。ここにも convivialité を尊ぶとともに、研究と生活をきりはなすことはできないというお考えがあらわれていると思います。

2007 年から、「新領域開拓のための人社系異分野融合型教育」という教育プログラムが文科省の「組織的な大学院教育改革推進プログラム」として採択され、大学院の専攻間の連携を活性化教育・研究機構「インターファカルティ教育研究イニシアティヴ」(略称 IFERI) が設置され、青木先生がその代表者になられました。この枠ぐみによって幾多の国際研究会がひらかれ、博士課程の大学院生や研究員の雇用も生みだされました。

2011 年からは、言語学の知見を国際コミュニケーション、ひいては外交にまで生かすことをうたった「国際交渉力強化プログラム」(GNP) が文科省の予算を得て発足し、当時の内閣府からも関心をもたれたとうかがっています。

その他、TRANS プログラム、模擬国連、大学の世界展開力強化事業、北アフリカ研究センター (ARENA) などをあいついで主導され、総合大学の強みを生かした異分野融合的な教育・研究を組織的に推進されました。

2018 年からは筑波大学人文社会系の系長をつとめられ、非常に困難な組織の管理運営を担われました。たびかさなる組織改編など、人文科学に対する逆風が年々強くなるなか、いわば先手を打ってさまざまな施策をうちだした青木先生は、終局的には人文科学の孤塁を守るために尽力されたものと信じています。

しかし、フランス語学領域は、2019 年から学類レベルでは一般言語学コースに統合され、大学院レベルでは文芸・言語専攻、現代語・現代文化専攻を横断して発足した人文学学位プログラムの言語学サブプログラムに統合されることになりました。同サブプログラムは、上位組織からすべて表記すると、「筑波大学人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群人文学学位プログラム言語学サブプログラム」という名称になり、履歴書の字数を増やすのには役立つけれど、一見するだけで言語学 (もはや「フランス語学」でさえない) のセクションが多重に吸収合併の対象になっていることをあらわしており、フランス語学領域の苦しみを体現しているようにわたしには思えました。同時に、新しい組織でわたし自身がやっていけるのかどうか、まったく自信がもてませんでした。

そのようなこともあり、わたしは 2019 年から東京大学に転任しました。その予定がきまり、筑波大学退職の報告を申し上げるために系長室にうかがったとき、その系長室の主が青木先生だったことは、わたしにとっては幸運であったとともに、すこし寂しいことでもありました。青木先生はわたしの転任を祝ってくださり、こころよく送り出してくださいました。

その後もわたしは青木先生と相談のうえ、筑波に残留する大学院生を側面的に支援しつづけました。筑波を離れてからも、博士論文の副査にたびたび加えていただきました。

青木先生はご自身の就学時代から、フランス語圏のみならず、世界のあちらこちらを旅され、つくばにおられるときも、そこに定住するのではなく、あたかも旅をつづけているようにふるまっておられました。常同的な行動をきらい、つねに新鮮な経験をもとめるという意味で、「人生は旅である」というメタファーを体現しておられるかたでした。

思えば、言語学も旅のメタファーでとらえかえすことができる営為です。ことなる言語をわたりあるき、対照することによってこそ、あるひとつの言語のなにが真に特徴的なのかを理解することができます。加えていうと、herméneutique (解釈学) という語は、旅人の守護神である Hermès の名まえを語源としてふくんでいます。そのようなことから、言語学は内在的に旅であるのかもしれないと思っております。

そして、青木先生がフランスで師事されたアントワヌ・キュリオリの発話理論のみならず、ガストン・グロスの語彙文法理論、ジャン＝クロード・アンスコンブルのステレオタイプ理論な

どにも通曉され、ステレオタイプ理論にもとづいた国際研究会も主催するなど、理論的にも polythétique な先生でした。複数の理論に接していても、けっしてそれらを教条化することではなく、「おなじ問題意識がことなる理論にみられるので、理論間のパラフレーズをすることが重要だ。ゆめゆめ、単一の特定の理論の使節になってはいけない」とおっしゃっていました。この意味でもまた、青木先生は、「旅する言語学者」の称号が本当にふさわしいと思います。

研究者としての青木先生は唯一無二の位置を占めておられるので、だれもそのとおりに真似をすることはできないでしょう。わたしなどは、いまだに制度的な仕事がいへんにが手で、たった一枚の書類を書くにも四苦八苦しているありさまです。青木先生はわたしより 11 歳としようえなので、筑波大学在勤当時は、いつも 11 年前に青木先生がどんな仕事をしておられたかを思いおこしては、いかに自分が劣っているかと思ひなやんでいたこともありました。

しかし当然ながら、研究者にはいろいろなタイプがあります。青木先生から多くを学びながらも、自分も独特の歩みを進めてゆくしかない、といまでは信じています。おそらくこれが、青木先生からわたしが受けた最終的、決定的な教えだったのではないかと思います。

(わたなべ じゅんや / 東京大学教授)